の膝下での神楽奉納と考えてよい。宮崎の民俗文化は修験の要素を濃厚に残していると言えよう。

五　おわりに

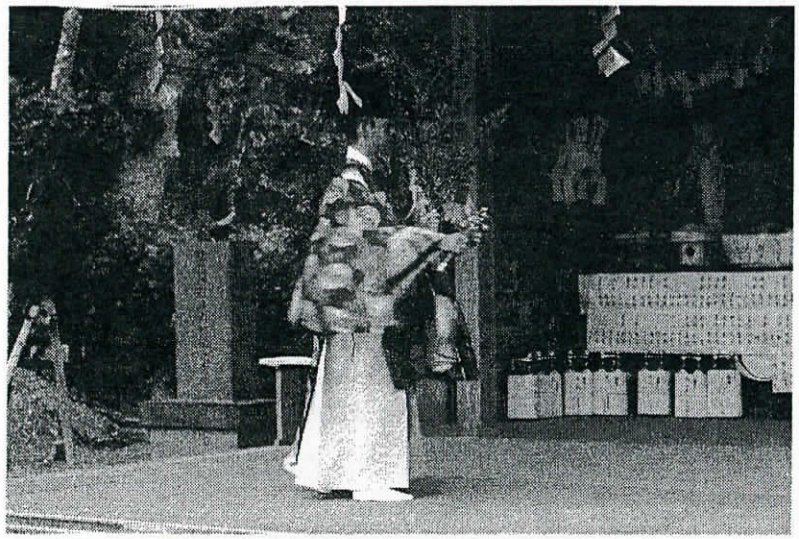
以上、神楽、ひな山、修験の活動などを通して、合併後の宮崎市の文化を概観した。これまでの「神話の里　宮崎」のイメージを覆す様々なデータが得られたと思う。記紀神話に特化した地域イメージを作り上げ、観光・教育・地域づくりに大きな影響を与え、その路線を作り、そのレールの上を走り続けてきたと言ってよいだろう。しかし、文化というものは長い歳月をかけて複合的に築き上げられている。古代からの純粋な神話とか文化が継承されることなどあり得ない。仏教的、修験的、あるいは様々な民間の信仰や宗教、まじないや俗信、迷信など、さまざまな精神文化が複雑に交錯しながら今日に引き継がれていると考えるのが自然であるのは、誰が考えても理解できるはずである。

今「宮崎再生」が叫ばれている。今ほど「宮崎再生」が叫ばれることがないほど、混迷の時代を迎えている。再生させなければならない「宮崎」とはいったい何なのか。それをどこに求めるのか。本当の「宮崎」が分からなければ、再生のしようもないことを理解しなければならないだろう。

神話の里・神楽の里と言われて久しい。しかし、それは高千穂や椎葉、或いは霧島山麓といった山奥深くの神楽だけを見て名づけられてきた。宮崎平野の神楽の実態調査はまだ端緒についたばかりである。それでも、県南や県北の両方の文化が流入し、しかも従来知られていなかった独特な「田の神」が存在することも分かった。また、旧薩摩領から平野部にかけての杵舞は箕を伴う極めて特殊な舞であることも掴みかけた。箕を持つ女装の異人が山の神であるという仮説が成り立つなら、綾のひな山の問題とも絡めて、新たな山の神信仰の姿が見出せるに違いない。そこには、山に対する日本人の感性が秘められているからだ。山は mountain だけを指すのではない。庭の中に作られた盛り土も、日本人にとっては「山」なのである。恐らくこれは古代の大嘗祭に作られる標山に通じるであろうが、南九州の神楽の大宝の注連にも影響を与えていると思われる。

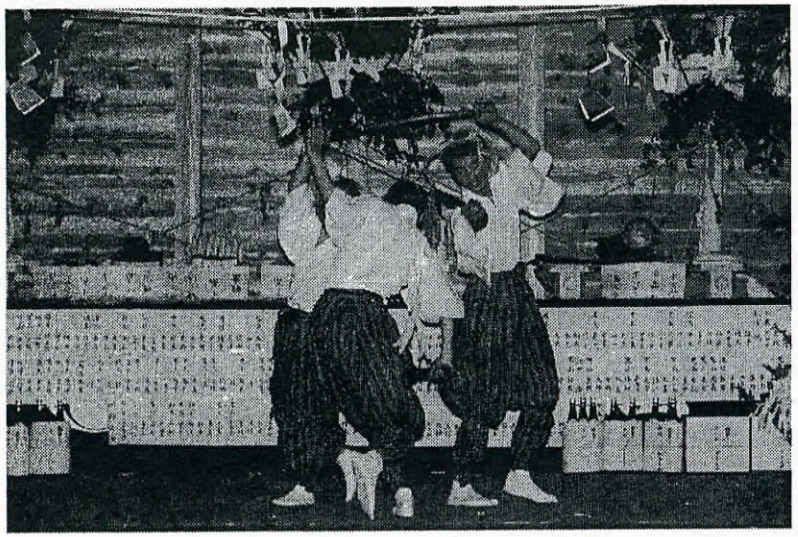
最後に、神話を大切に語るのは何も神道家だけではないことを申し述べておきたい。鵜戸神社にしても、仁王護国寺という神宮寺が信仰を集めており、近世以前まで神仏は一帯となって祭られるものであった。修験者はまさにその仲を取り持つ役割を担っていた。野田泉光院も神武の宮居には納経したと日記に書いている。現在の宮崎神宮・皇宮屋・景清の史跡・名田神社・沙汰寺（現在は廃寺）・帝釈寺などは、民衆から見れば同等の大切な宗教施設に他ならなかったと言えよう。

新宮崎市の誕生により、宮崎市民はより豊かな歴史を身近なものにすることができた。本来の宮崎の文化や価値観を、従前の先入観を排除して素直に見つめなおすことができれば、「宮崎再生」の道も自然と切り開かれるに違いない。この度の合併は「宮崎再生」のための第一歩であってほしいと切に願う。

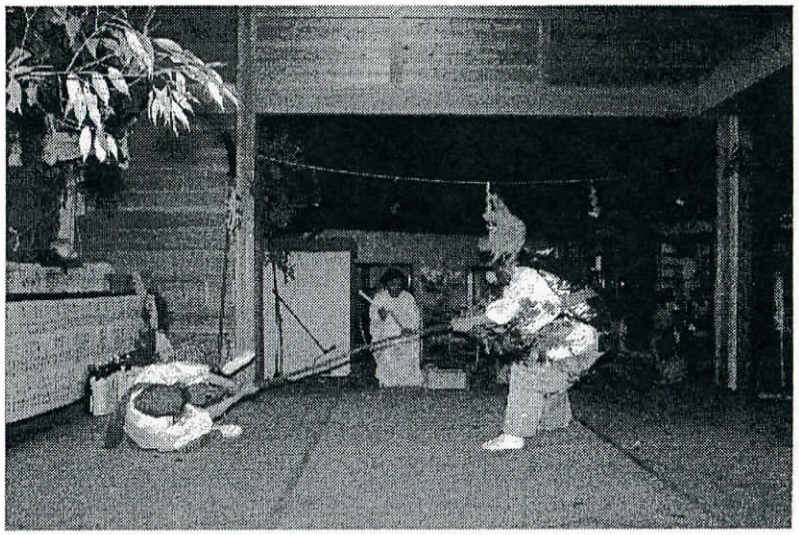


生目神楽　神酒舞

生目神楽　鬼神



生目神楽　三人剣



生目神楽　太玉